

## ■ 書 評



### 精神科薬物療法の プリンシプル

仙波純一 著  
 中山書店 2012年5月  
 320頁, 定価 4,725円

本書は若手精神科医を主対象として精神科診療を行う上での“行動原理・行動規範(プリンシプル)”を示したものである。精神薬理学を基盤とし総合病院の精神科医である仙波純一博士が、埼玉医大総合医療センターメンタルヘルス科での講義をもとに書き下ろした。本文は6章構成で303ページからなる。第1章「薬物療法を始める前に」、第2章「薬理学から見た精神科薬物療法」、第3章「EBMと診療ガイドライン」の前半3章が総論(110ページ)であり、薬理作用や薬物動態と相互作用の基礎的な知識を要約している。さらに、各論(140ページ)である第4章「精神科薬物療法の実際 治療法各論」で抗うつ薬、気分安定薬、抗精神病薬、抗不安薬・睡眠薬の順に要点を述べ、第5章「第一選択の薬物が無効であったときの薬物の変更・併用」が続いている。最後に、第6章「さまざまな場面での精神科薬物療法と留意すべき副作用」で、日常臨床で不可欠な事項を補足している(第6章は53ページ)。引用された図表はわかりやすく、多くの引用文献から疑問点を明らかにできる。

近年多くのSSRI, SNRI, NaSSA, NDRIがわが国で市販され、各製薬企業が薬理学的相違に基づく優越性を述べているが、これらの特徴と使い分けを記憶することは評者にとっては困難であった。仙波博士は「特定の症状に特定の神経伝達物質を対応させることは、着眼的には正しいこと

のように見えてしまいます。(中略) 製薬企業はしばしば他社製品との違いを強調するために、この考えを販売パンフレットなどで強調しています。しかし、現時点では特定の症状に対して特定の抗うつ剤が有効であるというエビデンスは多くありません」(p122)と明快に述べている。また、抗精神病薬の項では「第2世代抗精神病薬がはたして、従来の抗精神病薬よりも全体的な臨床効果に優れるかについては議論があります」(p172)と記し、CATIE研究などを概観して最新の知見をまとめている。

本書は地味で堅実な内容である。一読すれば合理的な薬物療法をすぐに実施できるわけではない。むしろ、的確な臨床診断と病態評価の上で、認知行動療法などの心理療法、患者教育、リハビリテーションなどの治療方法の中で精神科薬物療法を正しく位置づけるために基礎的な知識を与えようとするものである。本書のような“行動原理”を示す書を精読した上で、疾患別の治療ガイドラインへと進むことが望まれる。統合失調症の薬物療法は、第一世代の抗精神病薬、多剤併用療法、単剤の大量療法を経て、第二世代の抗精神病薬、単剤療法と変遷してきた。近年は抗精神病薬に気分安定薬や抗不安薬がaugmentationまたはcombinationの名のもとに使用されている。仙波博士はこれについても慎重な判断を述べている。評者には、第5章の「第一選択の薬物が無効であったときの薬物の変更・併用」が大変ありがたい。若手に限らず精神科専門医が精神科薬物療法の知識を更新し整理するために本書は好適の書である。

本書の著者の仙波博士は精神神経学雑誌の編集委員の一人である。編集委員の手になる著書を公的な雑誌の書評欄で取り上げることにについて公正を欠くことがあってはならないと自戒し、控えめに書評を作成した。

(有馬邦正)